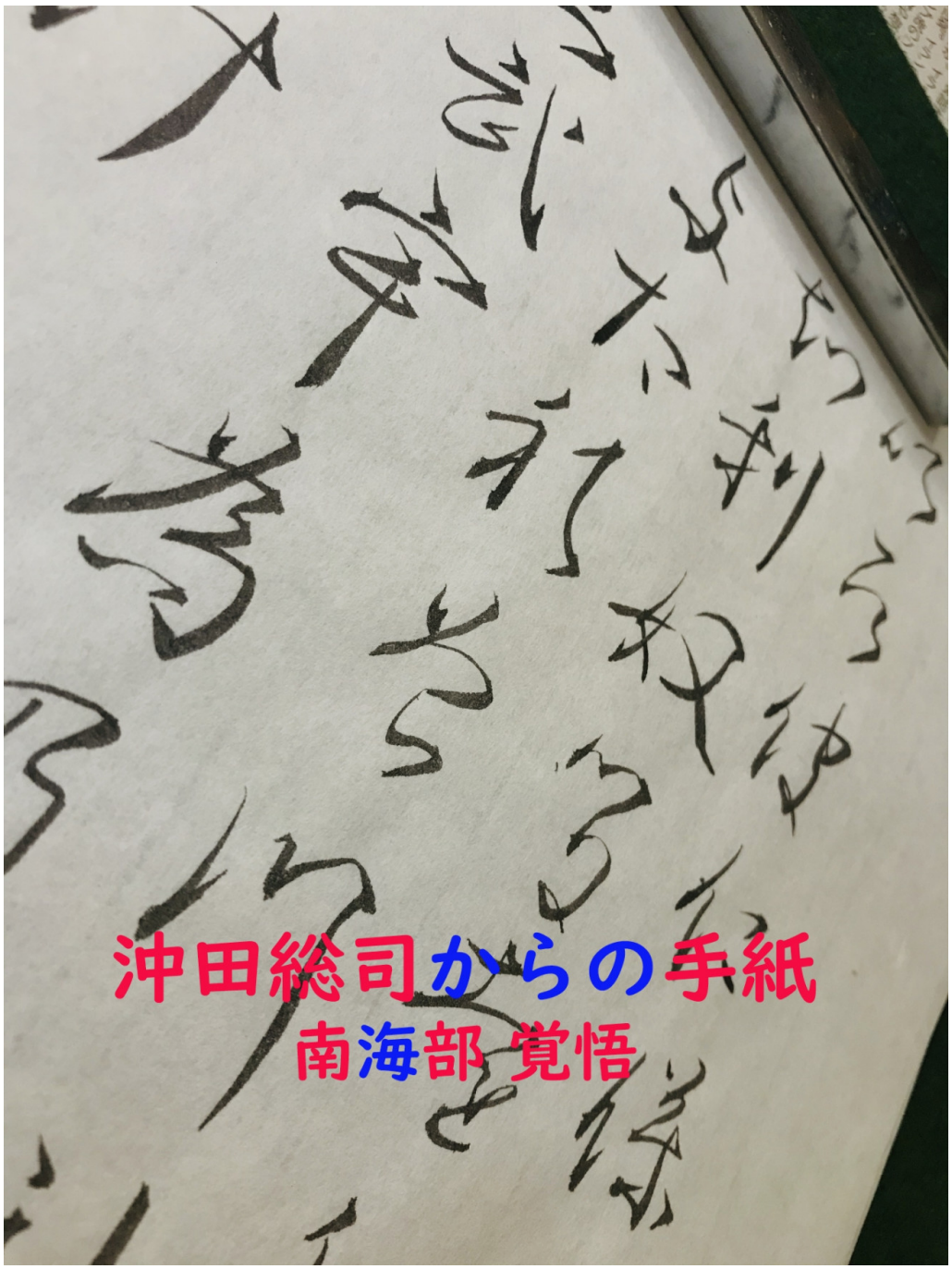

沖田総司からの手紙

南海部 覚悟

目次

Ⅰ 1
Ⅱ 2
Ⅲ 4

Ⅰ

*嫋やかにうねる砂丘の向うから、穏やかな風が吹き通す。
豊かにヨードを含んだ濃密な潮風だ。
振り返ると、山脈から続く丘陵一面に棚田の稲穂がたわわに実っている。
毛皮を纏った屈強そうな男が、畦道をゆっくり降りてきた。
肩から下げた荒縄の先に数羽のウサギが括られている。
頭上に大きな竹籠をのせた小柄な女と、何やら言葉を交わす。
男が荒縄を解いて、ウサギを一羽竹籠に放り込んだ。
海から畦道を登ってきた一団が、行き交う人に乞われるまま、魚を分け与えている。
法被りの手ぬぐいを結び直して、女たちが棚田に入る。
竹で稲架（はざ）を組み、刈り取った稲を架けてゆく。
人々は必要な時に分け与え、必要な時に働いた。
それで充分だった。

ある日、神に祈る少女が現れた。
神仏が宿るといわれる、巨大な岩の割れ目の前で、日がな一日祝詞（のりと）を唱えている。

少女の必要に応じて人々が食料を持ち寄った。
或る者が火を起こし、持ち寄られた食料を調理する。
或る者は山から木を切り出し、巨大な岩の前で井桁に組んで屋根を架け、少女が祈る祠を成した。
女たちは繭を紡ぎ、絹を織って布とし、衣に仕立てて少女に着させる。
手先の器用なものは、玉石を磨き、砂金を溶かして型に流し、鏨で文様を刻んで祭壇に供える。
屈強な男たちは武器を持ち、少女の祠の手前に控えて近づく者を監視した。
そして、それらの者（彼ら）は専らそれに専念し始めた。

（彼ら）の必要に応じて、物を持ち寄る人々が現れ、（彼ら）の住居と作業場が造られて、食事と寝床が提供された。

（彼ら）の役目に応じ衣服を設える者、玉石や砂金を集める者、武器を作る者、蚕を育てる者、祭壇の供物を収穫する者、海に出て漁をする者、山に登って猟をする者、更に（彼ら）を守るため武器を構えて戦う者等々。
（彼ら）の周りで働く人々の間で相互に取引が始まり、価値の交渉をスムーズにする為、貨幣と市場が生まれた。
貨幣を媒体として人々は益々専業化し、製品やサービスの規模が拡大して品質が上がった。

人々は、先鋭化された技能により物やサービスを生産し、それを売って貨幣を稼ぎ、個人の欲求を市場に合わせることによって、生活を維持し始めた。
生産は規格化され、社会も規格化される。
しかし、規格に馴染まない一団も現れる。
治安を維持するため、統治システムが生まれ、それらを統合して国家となった。*

Ⅱ

そのビデオレターが、広島県警本部の端末に送られてきたのは、宵の口から降り始めた霙が、本気の雪に変わった深夜のことである。
当直のスタッフが、眠気眼でぼんやりと見上げた先の、パソコンモニターに映し出された。
冒頭の動画で一気に覚醒した。
大きく口を開けた巨大な鮫を、全身黒装束の男が黒づくめの水上バイクに乗って、薙刀で真っ二つに叩き斬る映像だった。
大騒ぎになった。
深夜にも拘わらず幹部クラスが全員招集され、その中には当然、玲子たちカップルも含まれていた。
黒装束を背景にして、ビデオレターはさらに続く。

*無数の国家が雨の後の筍のように生まれ、お互いにいがみ合った。
長い戦いの後、山・海・田畑は荒廃し人々は自らの衣食住まで他人に頼らざるを得なくなった。
一部の強大な生産者の廻りに、唯一その専業にのみ生活の糧を見出す大多数が集まり、技能も無い者は、労務を提供して報酬を貪る。

貧富の差が拡大し人々の不満も深まったが、構築された社会システムに、自らを合わせる以外になかった。
やがて、産業革命を経て生産力は増大し、利益の追求に伴って、常に過剰生産となる。
自然環境が破壊され、その苦悩は全国津々浦々に及んだ。
本来経済活動とは、資源（富）の偏在を解消すべきものであるが、生産物（富）の偏在をいっそう助長する方向に作用する。
金融という怪物がそれに拍車をかけた。
資本と生産物が都市に集中し、人々が共有すべき自然資源が、地方から奪い取られていった。

ある日ある学者が、大量生産品質にほぼ匹敵する工業製品の、個人製造システムを考案する。
精密な 3D プリンティングテクノロジーを主体としたこの製造システムは、工業製品に留まらず有機物を扱って食品にまで製造範囲を広げた。
また、同システムの可逆性に注目し、生産物からピュアな原材料を高効率でリサイクルする技術が開発された。
同時期、ある科学実験事故を発端として、個人レベルに於いてほぼ無尽蔵の核エネルギーシステムが開発される。
そして、ネット上にはこれらシステムを扱うオペレーションアプリ（ドライバソフト）と、実際の製造物に対応する 3D デザインデータが、無償であふれ始めた。
人々はここに至って、原材料とエネルギー、製造ノウハウを取得し、生活に必要な最低限の物資を無償で製造できるようになった。

少しづつ貨幣がその価値を失い始める。
金で買えるもの（物）は、全て無償でプリントアウトできる・・・。
人々の欲求はプリントアウトできない有料の（サービス）に向かった。
人にサービスを提供する無数のドローンやロボットを製造し始めた。
手始めは、住宅の床を這いずり回ってゴミを集めるお掃除ロボット。
続いて、室内に侵入する様々な害虫を、低出力レーザーで追跡・駆除する自律制御殺虫ロボット。
更に、外出時の行動範囲を広げるパワースーツ。
同様、外出時に同行・監視・通報して主人の身の安全を担保するマイクロドローン等々・・・。*

玲子の端末に電子メールの着信があった。
（親展）のセキュリティーロックが掛けられている、スマホの SMS を確認してパソコンにコードを入力すると（内閣官房副長官）と差出人が表示された。

「三浦副長官からよ、政府にも同じビデオレターが届いてるんだって。間もなく警察庁を通じて全国の警察に指示があるみたい・・・。」
小声で隣にいた笑子に伝えた。

Ⅲ

*留意すべきは、これらのロボットやドローンを操る AI が、全てネットを経由して相互に情報をやり取りしていることだ。
全世界の、ネット接続人工知能（AI）の CPU・ストレージの総数は、人間ひとりの神経細胞総数（大脳皮質ニューロン）約 210 億個を遥かに凌駕する。
今やネット上のビッグデータから下される AI 判断のアルゴリズムは、人間には到底追跡できない。
AI 自体が、与えられた課題其々に、その都度最も相応しいアルゴリズムを選定する時代だ。
量子演算を適用した AI 稼働の可能性も、多くのメディアで取沙汰されている。
ネット上を量子ビットが往来する世界が、すぐそこまで迫っている。
十数年前、大分の海岸に打ち上げられた木製の潜水艦・福岡のやくざを全滅させたマイクロドローン・久住高原の蛇・丹波山ショッピングモールのロボット・三次の六角虫・そして京都御所と京都駅、伊勢神宮を襲ったロボットたち・・・。
本当に（彼ら）は、犯人とされる人間の意思に基づいてのみ稼働していたのか・・・。
現場の様々な局面で、機械独自の判断を下したのではないか・・・。
自律制御という名の下に、その部分の詳細な検証は行われていない。
三次の六角虫は、細胞内でたんぱく質を合成するまでに進化している。
もし、人の体内で人に有害な猛毒のたんぱく質を作り始めたら・・・。
ネット上の数百億の人工知能は、本当に人間の管理下にあるのか・・・。
私は、今まで多くのロボットやドローンを私の刀で斬ってきた。
生身の人間と違い（彼ら）はこの刀でなければ斬れない。
広島県警の一部で私のことを（沖田総司）と呼ぶ者がいるようだが、敢えてその名を受け入れよう。（ただし、なぜ近藤勇や土方歳三ではないのか、解せぬのだが・・・。）
昨今の世の中を憂い、沖田総司は今後も（彼ら）を斬る。
そして（彼ら）を擁護する人間も斬る。
（彼ら）とは（機械の意志）のことだ！*

モニターのビデオを見終わった玲子が、何かに弾かれたように椅子から立ち上がると、
「———笑みちゃん、すぐにサルベージの会社探して！」
「私、今から本部長と交渉してくる！」
「———何の交渉ですか！」
「あの、巨大鮫の遺体引き揚げるのよ！」

1 週間後、瀬戸内海の海底から引き揚げられた鮫の遺体を、奥寺たち SRI 総出で解析した結果、巨大な人工物であることが判明した。
「———金属製の骨格を樹脂の筋肉が覆っています、内部には無数の CSF（圧縮剛性繊維）のケーブルが走って、筋肉を自由に動かせるようです。」例によって奥寺が説明する。
「分厚い外皮の内側は温度によって密度を変える特殊なオイルで満たされています、浮力を調節するんだと思います。内部が空洞だった三次の観音像よりも、実際の鮫に近い構造ですね・・・。」
「———通信はどうするの？地上から操作するにしても、水中は電波が届かないでしょ？」玲子が尋ねる。
「ソナーですね、海中の様々な音をフーリエ変換して、必要なデジタル信号を抽出取得する・・・。」
「鮫の鰓にあたる部分の中央に、安定核原子炉があります。数十年連続して海を泳いでいられます。」
「———目的は何だと思う？」
「分りませんね。ソナーでは遠方からの操作は無理です、海岸から遠く離れればスタンドアロンとなります。」
「———目的は？」玲子が繰り返す。
「データ収集かも知れません、海の中のビッグデータ・・・。」
「———機械の意志。」

二人の話を聞いていた笑子が、急に目を見開いて声を上げた。
「———沖田総司は、どうして自分が沖田総司だって解ったのかしら。私たちしか知らない話でしょ！」

———END———

*本編は、全てフィックションであり、実在する個人・団体等とは一切の関係がありません。悪しからずご了承ください。
尚、表紙に使用しました写真は、PhotoAC 様より転載させていただきました。*

沖田総司からの手紙

著　　南海部　覚悟

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社